

環境緑地のイメージ解析

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学工学部の学生員 大宮 敦

1 はじめに

都市周辺部における緑地は、落ち着いたうらおいのある都市景観の構成要素として不可欠な存在であり、また特に生産緑地とは異なる、生物的自然環境の保護を考える一方で地域住民が自然との触れ合いを求め散歩・散策等のレクリエーション利用ができるような人間の生存環境の保護をも考えた緑地——環境緑地——は、都市化の進展する昨今において、人々が健康的な生活を営む上で、メンタルな面からも重要なスペースとなっている。

本研究は、環境緑地のイメージ調査を行うことにより、レクリエーション空間育成の面からの環境緑地（森づくり）の基礎的資料を得ることを目的とした。その一例として盛岡市北山緑地地区を取り上げた。

2 対象地域

北山地区は、蔵風得水型の系譜をひいた盛岡市の北方の丘陵部に位置し、南部家墓地、北山寺院群が形成されている歴史的にも特色ある自然景観地である。この地区を中心に高松風致地区また環境保護地区である、外山岸地区・愛宕山地区を含む環境緑地帯（約590ha）を北山緑地地区として対象地域に設定した。（図1）

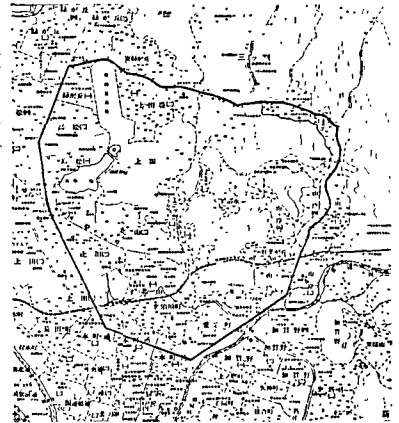


図1 北山緑地地区

3 調査の目的及び方法

調査の目的は、盛岡市民の北山緑地地区に対するイメージを再生することであり、その方法として被験者を盛岡市民よりランダムサンプリングにより選定し、調査員が被験者の家を直接訪問する面接調査法によって北山緑地地区の地図を直接描写してもらいイメージマップ法（再生法）を行った。調査期間は昭和61年10月17日～11月24日で、366人（男155人、女211人）の回答を得た。

4 結果及び考察

北山緑地地区のイメージマップにおいて再生された要素は409個にも及ぶ。このうちバスと結合点としてのノードの要素を除いた313個の景観要素を、横軸にイメージ再生順位、縦軸に再生率をとり折れ線グラフに示すと図2（再生率2%未満省略）のようになる。図2からわかるように再生率とその順位の関係は対数曲線を描いて減少しており共通にイメージされる景観要素は比較的小数の要素に集中していることがわかる。これはよりイメージの集中する12番目（再生率25%以上）までの要素を景観操作上重要な要素と考え、バグリックキーエレメント、13番目以降再生率がほぼ一定となる5%までの要素（再生順位13位～51位）は、北山緑地地区内

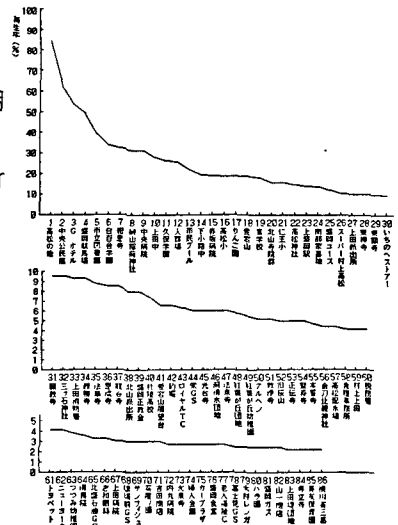
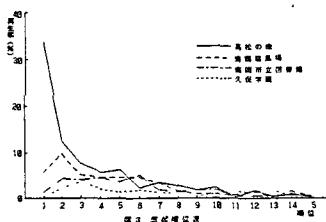


図2 イメージ再生率と再生順位

の空間的・景観的特性を示す要素と考へて、セミパブリックエレメント、5%以下の260個にも及ぶ要素は多様で興行を生み出す要素と考へて、パーソナルエレメントとする。ここでキーエレメントに注目し、横軸にその要素が描かれた順位を、縦軸にその再生率をとりグラフにすると、描かれた順位が下がってくるに従って上位の要素への集中度が下がり、より均等な分布を示すことがわかる。図3は高松の池周辺についてそれを示すグラフである。次に図4はケビン・リンチの手法で在住年数別(0~10年、10年~30年、30年~)と全体のイメージマップを作成したものである。これから北山緑地地区のイメージ形成を考察すると、在住年数0~10年では高松の池周辺と中央公民館・グランドホテルに集中していたイメージが在住年数が増すにつれて北山寺院群や榊山稲荷神社、南部家墓地、東禅寺へと広がっていく様子がわかる。また全体の要素数は在住年数が増すにつれて増えてきているが、要素を象徴を示す要素と場の状況を示す要素に大別してマップを見てみると、在住年数が増すにつれて場の状況を示す要素が減り、象徴を示す要素が増えていく様子がわかる。全体のマップより北山緑地地区のイメージ構造を見ると、高松の池を中心とする地域(競馬場を含む)、中央公民館・グランドホテルを中心とする愛宕山地域、報恩寺を中心とする北山寺院群、榊山稲荷を中心とする地域、中央病院・上田を中心とする地域となる。

5. まとめ

北山緑地地区内でのイメージマップ法による再生要素をレクリエーション資源の観点から類型化し、一般化すると表1のように示される。これより北山緑地地区は環境緑地の割には人文資源の内容の豊富さに比べ、自然資源の内容が劣っていることがわかる。

